

明治期におけるスポーツジャーナリズムの 一断面

—官立山口高等学校長距離競走の報道に着目して—

渡 辺 勇 一

はじめに

わが国の新聞ジャーナリズムは幕末から明治初期が起源とされる。それまでの木版刷りから、鉛製活字の出現が新聞発展に大きく寄与してきた。最初の日刊紙「横浜毎日新聞」が1870（明治3）年、現存する最古の新聞「東京日日新聞」（現毎日新聞）は1872年、2年後に「読売新聞」が生まれた。江戸から明治の新時代到来とともに、知識層の政治的世界を映し出す政論新聞や市井の庶民を対象とした小新聞などに大別、系列化されながら伸長を繰り返していった。

これらは主に首都・東京での発刊であったが、一方で地方でも群小新聞が創刊、廃刊を繰り返しながら各地に広まっていった。自由民権意識の高まりや政党の機関紙化、地方政府の御用新聞化などさまざまな曲折を経て定着していった。1県に複数の新聞が乱立する状態は戦前昭和期まで続いていたのである。

こうした中で、スポーツ報道はどのような道筋をたどってきたのであろうか。今日では新聞スポーツ面は拡大し、内外から発信される運動記事は膨大な量であり、ジャーナリズムの少なからぬ位置を占めるまでに肥大、発展を遂げてきている。ここでは、新聞スポーツ報道の黎明期の一端を明らかにするべく、明治期、山口県の地方紙「防長新聞」の試みを手掛かりとしたい。なぜなら、防長新聞が1899（明治32）年2月に報じた官立山口

高等学校（以下、山口高校）生徒による長距離競走の報道こそが、陸上競技としてのロードレースを世に伝えた最初の記事と目されるからである。

山口高校の長距離競走報道は直ちに、東京の時事新報が追随し、英字新聞であるジャパントイムズが転載した。さらには雑誌ジャーナリズムも取り上げ、本格的な運動雑誌として創刊された「運動界」、少年向けの「中学世界」が掲載するなど瞬く間に伝播したのである。新聞に端を発し、雑誌を経て世間に広まるコミュニケーションの伝達システム、報道の連鎖ともいべき現象は、いわゆる「メディアリンクージ」の典型とも指摘できるであろう。本州最西端で、部数約1,000部の地方新聞が報じたニュースの波紋は、当時としては異例の速さで広がりを見せたのである。

山口高校の長距離走は、これら報道機関の耳目を集めただけではない。2年後、時事新報はこれも初のスポーツイベントとされる東京・不忍池畔の「十二時間長距離競走大会」を開催し、同時期に大阪毎日新聞は「長距離健脚競走大会」を主催し、本格的な長距離レースとして関心を集めたのである。今につながる各種道路競走の原点と言えよう。

新聞スポーツ報道史に関する論考は、運動記者出身者の手になるものが散見できる。元毎日新聞の大野晃は「新聞が、エリートの専有物だった近代スポーツを広く国民に普及する先頭に立った¹⁾」とし、読売新聞OBの牛木素吉郎は「明治、大正期のスポーツ記事は教育的な技術論の側面があった²⁾」と説いた。朝日新聞出身の中条一雄は「(朝日)新聞のスポーツに関する考え方は、スポーツの紹介、普及、振興に力を尽くし、国民の健康増進に貢献することであり、常にスポーツの姿勢を正す批判精神あふれた紙面づくり³⁾」であったと評した。大手新聞社出身の彼らに共通するのはスポーツを牽引し、啓蒙する立場であったとする自負を垣間見ることができる。また、研究者によるものでは、明治30年代の大阪毎日新聞の体育・スポーツ関連記事を分析した綿貫慶徳は「この時期は相撲報道が大半であり、他のスポーツは競技会の告知や結果にとどまった⁴⁾」と結論付ける。伊東明は明治時代の野球、運動会、テニスに関する全国の新聞記事を丹念

に収集、網羅するなどの実証的成果を挙げた⁵⁾。

しかし、こうした先行研究はいずれも中央紙(全国紙)を素材として立脚したものであり、通史的かつ概説の域を出ない。あるいはメディアによるスポーツイベントの成り立ちなどへの言及であった。本論文では、地方紙の報道が中央のメディアに及ぼした影響の一端を明らかにし、明治期スポーツ報道史の側面を地方の視点から考察するものである。

1. 「山口高校長途競走」

1.1 防長新聞の第一報

1899年2月14日付の防長新聞2面、最上段に「山口高等学校の長途競走」の見出しで、83行(当時は1行22字)、字数にして1800字にも及ぶ破格の長文記事が載った。

同月11日、紀元節を祝して山口高生31人が山口市から防府市の天満宮まで「運動部陸上遠足会」と称し11マイル長距離競走に挑戦したとする内容で、文頭は「忽ち螢窓雪案の眼を轉じ直ちに跋山踏海の脚を試む」(原文)で始まる極めて時代がかった漢文調の記事である。「螢窓雪案」は、苦学して勉学に励むことであり、「跋山踏海」は山を越え、海を渡ること、「遠くまでやってきた」の意味であろうか。新聞記事としては異例の凝りに凝った書き出しであり、およそ客観報道とは程遠い文脈である。

続いて「全国に於いて未だ嘗て其の類を見ざる長途に飛鳥走電の技を闘はずをや、山口高等学校生は去る十一日の紀元節をトし…」(読点は筆者)とし、ようやく11マイルレースの挙行を報じた。記事内容を現代風に意識すれば、以下のようになる。

紀元節当日、式の後、午前9時にはラッパの合図で声援隊や写真隊が馬車や自転車ですぐ出発、同9時27分30秒に31人の選手がスタートした。みな飛ぶように走り、人力車や馬車を追い抜いた。氷上橋では9時47分中山権蔵、同三巻俊夫、9時48分中村隆祐などの順で3人は肩や踵を接した。鳴滝あたりで中村が前に進み、2位に夏秋十郎となり、中山は3位、三巻

は遅れた。

佐波山トンネルの前には「嗚呼 山高の健児」の大旗が士気を奮い立たせる。佐波山を下り、左折して旧道に入り、船橋を渡るとレースは終盤である。ゴールの宮市（現防府市）天満宮に達すると審判官が待っていた。成績は1位中村隆祐（工科2年）10時52分、2位高島京江（工科2年）同57分30秒、3位中山権蔵（文科2年）同58分10秒、4位夏秋十郎（文科3年）同58分20秒、5位菅利介（工科2年）同58分30秒…（原文は15位まで）。

選手はシャツ一枚に運動ズボンを着用した。洋服を身に着け靴を履いて9位の好成績を残した者もいた。優勝した中村は1時間24分30秒で、郵便脚夫より26分30秒も速かった。走り終えた学生たちは昼食の後、午後2時散会した。13日に高校で賞品授与式があり、1等賞はシャツ、上等支那カバン、書籍、たばこだった。新聞記事は「長途競走は最も好まし、唯運動界のみならんや精神上に於いても学芸上に於いても忍耐ある長途の進歩に非ざれば決して大成を期すべからず、諸子之を勉めよ」と結んだ。なお、記事には11マイル（17.7 km）とあるが、当時の山口高校から防府天満宮

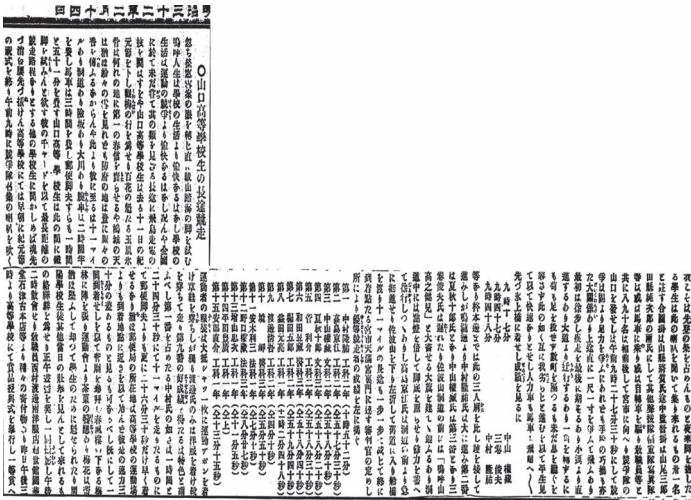


図1 1899年2月14日付防長新聞（部分）

裏門まで、距離にして約19 kmであった。

1.2 時事新報が掲載

防長新聞の記事が載った翌日の2月15日、東京発行の時事新報が4面の雑報欄に「山口高等学校の競争」と題して掲載した。以下、全文である。

「山口高等学校にては去る十一日の紀元節を以て同校生徒の俊足者等申し合わせて、山口より宮市の間凡そ11哩半のフートレースを催したるに、第一着中村隆祐氏は一時二十分、第二着高嶋京江氏は一時五十分間にて着したる由なるが、右と同距離の間を世界中にて最も速く走りたる人の時間は五十九分三秒時なりと言ふ」

時事新報は文字通りエッセンスだけを報じた。日付と距離、1、2位走者の氏名、記録である。ただし、目を引くのは当時の世界最高タイムと比較している点である。しかし、約19 kmの換算記録がどのように算出されたのかは記事を読む限り判然としない。

しかし、山口高校の破天荒と思える長距離競走の企ては、時事新報読者の目を引いたであろうことは想像に難しくなく、これまで同様の長距離レースが紙面を飾ったことは恐らくなかったであろう。

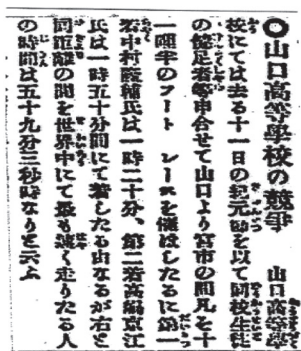


図2 1899年2月15日付時事新報

1.3 ジャパンタイムズ転載

時事新報が紙面化した翌2月16日、今度は英字紙の「ジャパンタイムズ」が時事の記事を英訳し、そっくり転載した。以下が全文である。

「A long distance foot race was held by the students of the Yamaguchi High School on the 11th last. The distance run was about 11 miles from Yamaguchi to Miyaichi.

Mr. Ryusuke Nakamura came in first covering in 1 hour and 20 minutes followed by Mr. Kyo Takashima who reached the final point 30 minutes later. We learn that the quickest run in record over the same distance was made in 59 minutes and 3 seconds.」

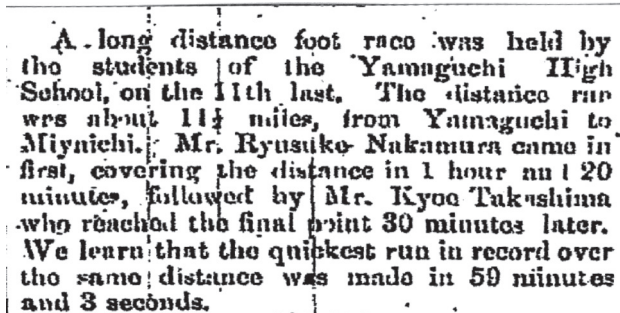


図3 1899年2月16日付ジャパンタイムズ

2. 相次ぐ雑誌への掲載

2.1 運動専門誌「運動界」

防長新聞（2月14日付）、時事新報（同15日付）、ジャパンタイムズ（同16日付）と3日間にわたって掲載された山口高校長距離競走の記事は、次に雑誌へ舞台を移した。

1897年創刊の雑誌「運動界」（東京・運動界発行所）は、わが国最初のスポーツ専門雑誌とされる。山口高の長距離レースは99年3月号（第3巻3号）の「活動録」中、「山高健児の十一マイル半競走」として2ページにわたる記事となった。

筆者は「在山口 好生（投）」とあり、山口高生の投稿と思われる。「現生滔々柔弱に流るゝの時、山口高等学校の健児、奮起して未曾有の壮烈を日本の運動界に示して、天下性根の元気を鼓舞せり」（原文）の書き出しは、前記防長新聞の気負った文章と通じるものがある。雑誌記事も防長記事とほぼ同じ組み立てながら、レースの経過は詳細を極めている。

文中には1位中村隆祐以下10位までの選手名、到着時間、所要時間を掲載しているが、雑誌ならではの誇大な表現も目立つ。レース後「百斤の肉を煮て食い、一同梅林の間に記念写真を撮影し、山口高等学校万歳を三唱して散会せり」「余は山高健児が運動事業を奨励し先鞭して恁る壯圖を挙げたる熱情勇気に感服す」と記す。文末には、優勝した中村は時々立ち止まっては後方をうかがうなど少なくとも7、8分を費やし、実際の優勝記録は「1時間15分前後であろう」と結んだ。

2.2 少年雑誌「中学世界」

「運動界」発行の翌月、少年向けの啓蒙雑誌「中学世界」（東京・博文館発行）4月10日号（第2巻8号）が「山口高等学校の陸上遠足会」とする記事と写真を掲載した。記事は300字余りと短いが、特筆すべきはレース後天満宮境内で撮影した選手、応援学生らの記念写真が掲載されている点である。さらにレースの距離も「約四里二十町（すなわち十一マイル三分の一強）、実に二万百七十六碼に及ぶ」としている。20,176ヤードは約18.4 kmである。この記事によって「11マイル半」とされたレースのほぼ正確な距離が類推される。さらに、末尾に「山口高等学校学友会発刊の学友会報の記事に依った」と出典を明らかにしている点で、無署名ながら自ずと筆者は在学中の山口高生と推察されるのである。



(内外兼報参照)

山口高等學校の競走隊
(山口市間十マイル長距離走)

図4 「中学世界」(1899年4月10日号)掲載の記念写真

「中学世界」は1900年1月号(第3巻1号)で、再び山口高校のレースを取り上げる。「明治三十二年の運動界」とする前年の回顧記事で、「二月に入りて先ず全国運動家の注意を喚起したる出来事は、山口高等学校学生が十一哩半といふ破天荒の長途競走試みたる事之なり」(原文)として、10位までの成績とともに掲載した。もっとも、内容は前年の「運動界」3月号記事を模したものである。

筆者は「在大学 加藤長風」とあり、当時の東京帝国大学の学生によるものと推察される。記事では山口高校の長距離競走のほか各地の野球、ボート競争の様相も紹介する。とはいえ、山口高校の試みによほど刺激を受けたと見え「余輩は特筆大書して、長途競走に先鞭をつけたる山口高等学校学生諸氏が壮挙を表彰せずむばある可らず」(同)と評した。

2.3 学友会報

東京で発行された雑誌「運動界」「中学世界」に掲載された1回目の山口高校長距離競走の出典元となったのは同校の生徒組織、学友会⁶⁾が発刊

する「学友会報」に載った記事である。1899年3月15日発行の学友会報第4号は「陸上遠足会に於ける長途競走」として、7ページに及ぶ観戦記を掲載した。

「朔風膚を裂き寒威凛冽，士気自ら銷沈せんとする時運動部陸上遠足会は俄然，宮市天神に向けて長途競走の壮拳を試み，以て校の元気を鼓舞したり」と書き起こす。続いて「由来，長途競走は，屢々外国に行はれ，之を我国運動に求むれば，最長八百乃至千碼に過ぎず，今，山口宮市の間約四里二十町弘（即ち十一マイル三分の一強）碼に換算すれば，實に二万百七十六碼以上」と，壮大な距離であることを強調する。さらに，コースの険しさを「平途の垣々たるなく，鯖山洞道あり，勝坂あり，佐波川あり，想ふに天下の群校中，恐らくは我校を以て破天荒とせん」と記し，初の長距離走の試みを熱のこもった筆致で紹介する。

記事はレースのあらましを事細かに記述している。2月11日午前9時27分30秒に31人でスタートした走者の順位が入れ替わる様子が臨場感とともに描写される。

スタート直後は「走者拳を握り，鐵脚を延して，勵聲叫呼，飛んで走れり，想うに意気満盛の餘響ならん」の様相であり，途上では「赤帽點々或いは群し或いは前後し，殆ど半里に及ぶ，其の快速は人力車を抜き，馬車を制す。行人驚き見て呆然足り」と，行きかう人たちの驚くさまを伝えている。

3. 明治中期のメディア事情

3.1 防長新聞の陣容

最初に山口高校のレースを報じた防長新聞は，高校所在地の山口県吉敷郡山口町（当時，現山口市）で1884（明治17）年7月に創刊し，当初は隔日の発行であったが，86年4月から日刊となった。創立者の吉富簡一は現職の県議会議長であり，県の政治世論機関としての立場を堅持したという。とはいえ，発行部数は微々たるものであった。山口県の統計書「山口県治

一班」や内務省統計報告書によれば、山口高が長距離競走を実施した前年（1898年）の防長新聞年間発行部数は34万9,925部で、一日平均1,128部にすぎなかった。内務省資料によれば、同年の山口県の日刊6紙の一日平均発行部数の合計はわずか8,243部であり、戸数あたり0.04部の普及度しかなかった⁷⁾。

表1 明治期山口県主要新聞の年間発行部数

新聞名	発行地	1896年 (明治29)	1897年 (明治30)	1898年 (明治31)	1900年 (明治33)	1902年 (明治35)
防長新聞	山口	309,293	311,614	349,925	638,922	655,521
長周日報	山口	308,842	336,463	348,773	廃刊	
馬関毎日新聞	下関	763,681	826,127	783,440	971,310	1,653,500
馬関物価日報	下関	347,824		460,308	906,760	893,491
防長実業新聞	防府	460,380	934,608	1,046,550	608,371	1,144,792

出所 「山口県治一班」明治29～35年、「内務省統計報告書」明治30年

※防長実業新聞は明治31年関西新報、33年関西日日新聞と改題

※明治期の山口県内新聞は祝日の翌日と月曜日は休刊

表1で明らかのように、19世紀末から20世紀初頭（明治30年前後）の山口県内で発行されていた諸新聞の部数は、まことに微々たるものであった。1898年に最も部数が多かった関西新報（防長実業新聞から改題）でさえ、一日当たりの平均部数は3,375部であった。

県庁所在地であり、最高学府の山口高校が存在した県都・山口町といえども人口17,617人（1899年）、県内最多の赤間関市（1902年から下関市）も同42,906人である。山口町は92年に単独町制となったが、山口市となるのは37年後の1929年まで待たなければならなかった。山口町は県行政の中心地であり、最高教育機関（高等学校）を擁し、さながら県内の政治・文化・教育の要であった。しかしながら、都市の規模としては極めて貧弱であったと言わざるを得ない。

県都山口で発行し、県議会議長が社長という防長新聞の当時の紙面は、通常4ページ建てで、1面は中央政界の動きを伝える「雑報」、2面が県政記事や県報など地元ネタ、3面は事件、事故などの地元ニュース、4面は広告という体裁を取った。とはいえ、1面記事のほとんどは、数日遅れの官報や中央紙記事を転載、あるいは手を入れたものが多かった。通信社が未発達な時代であり、直接中央ニュースを入手するには困難がつきまっていたようである。

防長新聞の社内陣容はどうであったか。山口県勸業年報（1899年版）によれば、98年12月現在の資本金は4,485円の合資会社で、従業員数は39人である。このスタッフで取材、編集、印刷、営業などに従事し日日の新聞を発行し続けたのであろう。

3.2 山高長距離走報道の疑問

明治30年前後の防長新聞の紙面内容は前述の通りであるが、山口高校長距離競走の報道にはいくつかの疑問が生じるのである。

図1で示したように、1899年2月14日付2面掲載の長距離レース詳報は83行、約1800字に及び、運動記事としては極めて異例の長文である。しかも全文にわたって美文調を駆使し、随所に漢語をちりばめるなど必要以上に読者を意識した文章である。通常の新聞記事スタイルを大きく逸脱した筆致であり、分量である。ニュース記事の内容としては不適當と指摘せざるを得ない。

通常、この種の新聞報道はまず、開催の告知記事を事前に掲載するのが一般的である。ところが、1月中旬からレース当日の2月11日に至る間で山口高校長距離競走の実施をうかがわせる告知記事は見当たらない。突然に実施されたわけではないはずであろうが、3日後いきなり紙面に結果が掲載されたのである。

防長新聞紙面において、地元の山口高校に関するニュースは大きな関心事である。事あるごとに紙面化を図っている。文字通り、最高学府の動向

は重要なニュース源となったであろう。

表2は1899年2月から6月までの5カ月において、防長新聞が掲載した山口高校関係の記事であり、表3は運動関連と目される記事を抽出したものである⁸⁾。

山口高校に関する記事は24件、運動に関係した記事は23件とほぼ拮抗した件数である。高校に関しては16件が校内の催しや入試に関する事前の告知記事であり、他は校長らの動静などである。一方で運動に関連したニュースは、9件が野球であり、7件が各地、各校の運動会に関した記事である。内容においても、新聞報道の鉄則ともいべき簡潔さを貫いており、ここでも山口高校の長距離レース報道は異例のスペースであり、一般的な傾向の中で告知記事のなさは不自然に思えるほどである。

スポーツ記事に関して特徴的な事象は、野球報道の突出ぶりであろう。山口中学（現山口県立山口高校）と広島尋常中学（同広島県立広島国泰寺高校）の一戦を紹介し、勝敗へのこだわりを見せる⁹⁾。山口への野球の移入は比較的早く、明治10年代後半とされる。中でも山口高校は97年4月、福岡へ遠征し第五高等学校（現熊本大学）と対戦、99年には「野球規則」を県内の各中学校に配布してルールの統一を図るなど、こと野球に関しては先駆的な存在であった¹⁰⁾。地元紙防長新聞としても野球に関するニュースは欠かせぬ素材であったようだ。

こうした中で、唐突に紙面化された高校長距離走記事の執筆者への疑問がわく。いわゆるニュース記事の態をなさぬ文体から、現役山高生の手によるものではなかったのではないだろうか。限られた編集陣容であるにもかかわらず、防長記者がわざわざ山口から防府まで高校生のレースを伴走したとは考えにくいからである。競走実施は2月11日であり、紙面化されたのは14日付で間に3日の余裕があった。この間に生徒が原稿を持参したことは十分考えられる。あるいは、生徒持参の原稿を防長社の記者が手を入れたとも推測できる。

防長記事の内容は、高校の学友会報第4号掲載記事と酷似している。学

表2 防長新聞の山口高等学校関係記事（明治32年2 - 6月）

日付	面	見出し	記事内容
2月19日	2	山口高等学校の第二部会	校内演説会の告知
2月25日	2	高等学生の英独語講談会	開催告知
3月2日	2	山口高等学校生の遠足旅費	旅費徴収告知
3月3日	2	山口高等学校の生徒出身府県別	在学生の府県別一覧
3月4日	2	山口高等学校生の修学旅行	旅程告知
3月7日	2	高等学校長会議	校長の出張日程
3月15日	2	山高生徒の修学旅行	旅程告知
3月28日	2	高等学校生の帰校	修学旅行から帰校
4月20日	2	高等学校生の体格検査	開催告知
〃	2	運動賞牌意匠懸賞募集の結果	意匠作品が決定
4月22日	2	山口高等学校大運動会	開催告知
4月28日	2	高等学校生の菓子店	運動会の出店告知
5月3日	2	運動界金品寄贈者	告知
5月10日	2	在京の両校長	校長出張日程
〃	2	高等学校教授の昇等	教員人事
5月16日	2	山高学友会学芸部大会	開催告知
5月18日	2	山口高等学校卒業生の送別会	開催告知
5月28日	2	山口高等学校の生徒募集	入試告知
〃	2	山口高等学校生徒の茶話会	開催告知
〃	2	山口高等学校教授の叙任	告知
6月13日	2	帝国大学へ進学すべき山口高等学生	進学学生名簿
6月16日	2	山口高等学校へ進学すべき中学生	山口中の入学希望生徒名
〃	2	山口高等学校の入学試験	開催告知
6月18日	2	山口高等学校入学受験者の注意	受験料告知

表3 防長新聞の運動関係記事(明治32年2-6月)

日付	面	見出し	記事内容
2月14日	2	山口高等学校生の長途競走	長距離競走の詳細
3月11日	2	高等尋中両校生の野球試合	開催告知
3月23日	2	広島山口両尋中の野球競技会	開催告知
3月25日	3	山口県尋常中学、広島県第一尋常中学野球合戦	広島遠征の出場選手紹介
4月5日	2	山口中学校生徒の奏凱	野球勝利の速報
4月8日	2	山広中学生野球合戦の詳細	広島遠征試合の詳細
4月14日	2	山口県中学校生徒の運動会	結果、成績
4月19日	2	岩国分校の大運動会	結果、成績
4月22日	2	山口高等学校大運動会	開催告知
4月23日	2	高等中学両校生徒の野球試合	結果、選手名
4月27日	2	山口高等学校校友会運動会第一回競技会	開催告知、選手名
5月2日	2	山口高等学校生徒の大運動会	結果、成績
5月10日	2	山口招魂祭に於ける撃剣の勝負附	結果、成績
〃	2	山口中学校豊浦分校第一回運動会	結果
5月11日	2	山口中学校生徒の野球競技会	開催告知
〃	2	良城青年会の壮挙	長距離競走の結果
5月12日	2	厚狭郡西部五小学校生徒連合運動会	開催告知
5月13日	2	山口高等学校柔道部大会	開催告知
5月17日	2	山高生徒の柔道会	結果、成績
5月20日	2	山口高等学校ローンテニス部大会	開催告知
5月21日	3	東京回向院大相撲の番付	新旧場所番付
5月28日	2	山口高等学校生徒の野球試合	開催告知
6月3日	2	山口中学校生徒の野球会	開催告知

友会報によれば、レース中、先導の自転車に続いて記事委員、写真委員は馬車で追走したという。また、出場31人のうち、5選手は会報の報告委員であった¹¹⁾。こうしたメンバーのいずれかが、防長新聞で長距離競走の顛末を述べたのではないかと推察されるのである。ちなみに、学友会報の印刷は防長新聞社に依頼していた。学生が新聞社に出入りすることは不自然ではなかったようだ。

3.3 時事新報報道の背景

防長新聞が掲載した記事には、明らかな誤りがあった。それは1位でゴールした工科2年、中村隆祐の到着時間の誤記である。新聞では「十時五十二分」とあるが、学友会報によれば正しくは「十時五十分」であり、1時間24分30秒とする優勝タイムは、1時間22分30秒のはずであった。

防長紙面を見た山口高生は訂正を申し入れたのだろうか。少なくとも翌日以降の防長新聞に訂正記事は見当たらない。ところが、防長の報じた翌15日付の時事新報には別の優勝記録が掲載されていた。むろん、東京近辺に配布される新聞であり、郵送でも山口に届くのはしばらく後のはずであった。

時事新報は慶応義塾創立者の福沢諭吉が1882年に創刊した。「独立不羈」の編集方針を掲げて政党に距離を置き、経済記事に重点を置いた。このため経済力のある商工業者、高級官吏らの支持を得、購読料は他紙より高いものの、いわゆるクオリティペーパー（高級紙）に位置付けられた。福沢が執筆する論説もさることながら「上品な編集ぶり」と正確な記事とのため「上流社会に信用を得ていた」との評価を得ていた。1898年の全国主要新聞の1日平均発行部数は①萬朝報（東京）10万4,939部②大阪朝日新聞（大阪）10万3,973部③大阪毎日新聞（大阪）10万1,986部④時事新報（東京）6万9,087部⑤東京朝日新聞（東京）5万1,616部の順であり、時事は東京紙では2位にランクされていた¹²⁾。

この時事新報が8行とはいえ「山口高等学校の競争」として記事化した

ことには驚きを禁じ得ない。4面の雑報欄に挟み込まれた記事は異彩を放つ。本州西端の高校生がひた走った長距離レースの情報をどのような手段で誰が知り、記事化したのか疑問が生じるのである。

99年元日付の時事新報の年賀広告によると、当時の全社員は総勢76人である。地方ニュース取材の陣容はとても足りないはずである。前年元日付紙面には「地方事情」として、「全国に70有余名の囑託通信員を配し、地方の出来事は電報を以て読者に報道する」とする記事が見える。事実、正月前後には年末や年始の各地の表情が短信形式で紙面に載っている。ちなみに、98年1月2日付地方事情の「山口」の項は「朝来降雨、例年に比すれば人出少なく、料理店寂し、大喪につき深淵の儀式を廃す」とある。山口町に時事通信員がいたことをうかがわせるのである。

従って、山口高の長距離走記事は防長新聞を読んだ現地通信員が電報で東京の時事本社に打電したと考えるのが妥当かもしれない。この際、山口高校生徒に確認したのであろう。あるいは、生徒の側から、記録訂正の意味を込めて時事通信員に接触したことも考えられる。

時事新報と山口高の親密な関係を裏付ける記事は、長距離レースを報じた3ヵ月後の99年5月9日付2面に見える。「山口高等学校運動会」の見出しで6行の短信であるが、「選手競争にて同校生徒橋本某氏優勝者となり時事新報社寄贈の金牌は同氏の受領するところとなった」と記述している。時事新報社は山口高校運動会のために、金牌（金メダル）を記念品として贈っていたことになる。東京に本社を置く新聞社が地方の高校運動会にそこまで便宜を図るのは異例ではないだろうか。両者の関係の深さをうかがわせるのである。このあたりの事情は校友会報や後に編まれた後身校の学校史（山口高等商業沿革史）にも記述はなく、経過は定かではない。唯一の接点と目されるのは、1896年まで時事新報2代目社長を務めた伊藤欽亮は山口県萩の出身¹³⁾であることから、山口高校に便宜を図ったのではないかと推測できるのである。ただし、伊藤は1880年の慶応義塾卒業であり、山口高校が第1回連合運動会を開催したのは伊藤が時事を退社した

後の98年であり、直接の関係をうかがわせるものではない。

いずれにせよ、山口高校長距離走の試みは防長新聞掲載の記事によって地元の知るところとなり、時事新報通信員が電報で東京へ報じたようだ。当時、大阪朝日新聞は西日本一帯50カ所に通信員を配置し、山口県には三田尻（現防府）、山口、馬関（同下関）に通信網があった¹⁴⁾。時事新報の「地方通信」欄に時折、山口の地名が載っているところをみると、朝日同様嘱託の通信員が配置されていたとみるのが妥当であろう。

3.4 ジャパンタイムズの英訳記事

時事新報が掲載した山口高校の長距離競走記事は即座に英字新聞のジャパンタイムズが転載した。時事の翌日、2月16日付であった。時事記事をそのまま英語訳したものである。これによって、英語に関心のある邦人、国内在住の外国人読者にも「本邦初の長距離ロードレース」が知れ渡ったはずである。

ジャパンタイムズがなぜ、山口の高校生の試みを記事化したのか疑問は残る。しかし、同紙の性格を考え合わせると理解は進む。1897年3月22日創刊のジャパンタイムズは、極めて時事新報と関係が深かったのである。社長山本季治は慶応義塾、時事新報創設者の福沢諭吉の親戚であった。タイムズ紙創刊に当たっては福沢やその知人から出資の協力を得て、印刷機も時事から譲り受けていた。

ジャパンタイムズ社史によれば、創刊当初の編集スタッフは外国人3人と日本人7人の計10人、このほか英文記者として若手が6人、それに主筆と経済担当記者の総勢20人程度だったという¹⁵⁾。外国通信社のロイター通信と特約した外報記事は定評があったものの、いかにせん少人数の編集陣では連日の紙面を維持するのは至難であり、速報を求める読者の期待に応えるには不十分だったようだ。このため、日本語新聞の記事の翻訳を掲載し、ライバル英字紙からの転載もあったという。邦語新聞の転載はもっぱら時事新報記事からであり、半ば黙認状態であったようだ。

当時の雑誌に掲載された在日外国人の投書では「この新聞（ジャパントイムズ）を読んでセコンドハンドペーパーと呼ぶ。半分は外字新聞の切り抜き、半分は東京日本字新聞の翻訳。この新聞では一昨日の事件を知り得るが、明日、明後日の事件を予知することはできぬ¹⁶⁾」と痛烈な皮肉の一文が寄せられている。事実、98年の警視庁統計では一日平均部数は1,100部程度であり、微々たる数字にしか過ぎない。発行部数も少なく、自前の取材態勢の不備を時事記事の翻訳で補った、窮余の策の一端が山口高校記事の翻訳、掲載にもうかがえるのである。

3.5 雑誌「運動界」「中学世界」

新聞に続いて、山口高校のロードレースに着目し、記事を掲載したのは東京で発行していた二つの雑誌である。

いち早く反応したのは運動の専門雑誌の草分けともいべき「運動界」誌だった。伊東によれば、同誌は萬朝報の英文記者だった山県五十雄を編集主任とし1897年7月、運動界社から創刊された。「純粹の意味での体育・スポーツ雑誌の最初のものであろう」と伊東は指摘し、わが国スポーツジャーナリズム界にあって「画期的な出来事」と評価する¹⁷⁾。同誌創刊号の「発行の趣意」には「良国民を得んと欲せば先ず盛んに我が青年子弟に運動体育の事を奨励し、以て健康なる精神の宿る健康なる身体を得しむること最も大切なりといふべし¹⁸⁾」と掲げた。前年にアテネで近代オリンピックが始まり、高校、中学校友会に運動部設置の機運が高まった時代を背景に、スポーツ愛好家の読者を狙って誕生したのである。

運動界の執筆陣は東京帝国大学や第一高等学校の学生、生徒、卒業生を中心に、早稲田、慶応、日本体育会体操学校などの私学関係者、地方の尋常師範学校生らに及んでいた。

同誌は通巻33号、1900年4月号までしか継続できなかった。まだスポーツの愛好者が少なく、発刊は時期尚早だったのか、継続するには資金が底をついたのであろう。ここでは詳述を避けるが、資金難を回避するべく同

誌がとった「支部」制度と懸賞募集に着目したい。

経営努力の一環として編み出した支部制度は、購読者25人（後に10人）以上を有する地に設け、支部幹事を置いて購読募集を奨励した。その代償として、投書の投稿採用、広告費の割引、出版物の割引斡旋などの特典を与えた。第2の懸賞募集は読者から投稿を募り、メダルなどの商品を用意したのである¹⁹⁾。

注目すべきは創刊2年目の98年4月号に、運動界山口支部として支部長・西野武一郎ら14人の氏名が掲載されている点である。各号紙面によれば支部結成は名古屋、浜松、大分に次いで4番目であった。同年6月号には「山口県運動近況」と題した投稿が載った。4月16日実施の山口高校陸上運動会の概況、野球部メンバーなど山高生の運動事情を紹介したものである。筆者は「在山口支部 巨眼生」とするペンネームであるが、前記14人の支部員の1人であろう。

前述(2.1)のように、山口高校長距離レースの様子は運動界99年3月号に載った。「山高健児の11マイル半競走」は「在山口 好生」の筆名による投稿であった。内容はほぼ、学友会報に準ずるものであった。レース経過、10位までの成績、優勝者中村隆祐の快走をたたえる表現は一にするものである。恐らく学友会報の筆者と同一人物か、文章を参考にしたものと思われる。

上記「11マイル半競走」が掲載された3月号の奥付によれば「3月7日印刷、3月8日発行」とある。レースは2月11日であり、短時間で記事の処理をし、東京の出版社へ郵送したものであると思われる。しかし、山口高校卒業生名簿を閲覧した限りでは、上記、運動界山口支部の14人はいずれも同高に在学していた形跡がないのである。同時に近隣の山口尋常師範学校在学、卒業生にも該当する支部員の名前は見当たらない。したがって、雑誌を購読していた支部員と雑誌社に観戦記を送った筆者の山口高生は別人と見るべきなのかもしれない。

一方の「中学世界」は「運動界」より1年遅れて1898年9月10日付が創

刊号である。当初は毎月2回発刊されており、山口高校長距離レースの様子は99年4月10日付(通巻2号8巻)である。巻頭のグラビアページに校舎と思われる写真と走り終わった走者、応援学生らの記念写真に添える形で「山口高等学校の陸上遠足会」(口絵参照)として記事となった。レースに伴走した学友会記事隊や写真委員と称する学生有志が、発刊されたばかりの学友会報(第4号)と写真を急いで出版社へ投函したものとみられる。

この雑誌は中学校生徒や中学校進学を断念した者たちを読者対象とした総合雑誌である。発行元の博文館は「明治期の出版史において、博文館という出版社の存在を無視して論じることが不可能であるように、同社の出版活動は他に類をみないほど多彩であり、権威に満ちたものであった」と評されるほどの有力出版社であった²⁰⁾。さまざまな年代別、カテゴリーの雑誌を刊行し、中学世界もその一つである。同誌は創刊の98年、1号あたり4万1,436部の大部数を誇った。2年目は約3万5,000部と推定されているが、当時の少年雑誌としては破格の部数である。「山口高校」の校名とともに、長距離レースの風評は全国の中学生たちに広まったのではなかろうか。「運動界」「中学世界」と、相次いで掲載雑誌の特性を見抜いて、素早く投稿したであろう山口高校生のメディア戦略の巧みさには舌を巻くほかない。こうして、山口高校長距離競走の試みは、地元新聞-中央紙-英字新聞-運動雑誌-少年向け雑誌へと次々と転載される「メディアリンケージ」現象を呼び起こしたのである。

4. 報道の波及効果

4.1 第一高等学校生徒の応酬

山口高校の試みに素早く反応したのは、最難関を自負する東京の第一高等学校(旧制一高、現東大教養学部)生徒であった。何事においてもトップリーダーたらんと意気込む彼らは恐らく、時事新報の報道によって山口高校のレースを知り「先を越された」の思いを抱いたことであろう。3か

月後の5月13日、1周1マイルの上野・不忍池畔を13周する長距離競走を企てる。

後に衆議院書記官長となった大木操らが執筆したという一高寮史「向陵誌」の陸上運動部史、明治32年度の項には「此頃本州西端に位し、浪荒き玄界灘を後に聳える山口高等工業（筆者注、山口高校の誤り）健児等は十一哩競走の快挙に出でたく世人の耳目を聳動せしめたり。もとより長距離競走の企図無かりし非ざるも長州男子の健脚を揮うを見ては負けじ魂の我校一千の健児、何ぞ軽々に看過せんや。彼にして能うものならば天下の男子を以て自ら任ずる吾等の更に大壮挙を企画せざるべからずとなし、茲に東台の下、青蓮匂やかに、さざなみの去来に鎮く不忍池畔に於いて五月十三日、十三哩競走の壮図を試みぬ²¹⁾」とある。山口高生に先んじられ、いたく一高生のプライドを刺激したものと見える。山口高の11マイル半を上回る13マイル（20.9 km）の距離に設定したあたりに読み取れるのである。

13マイル大競走には一高生38人が参加した。不忍池を13周するレースで脱落したのは2人に過ぎず、今村次吉と木下東作が同時にゴールした。わずかに今村が先着し、記録は1時間35分49秒であった。最後尾は2時間15分30秒かかり、今村らから遅れること約40分を要したのであった。首位争いの今村、木下とも一高の陸上運動部（陸上競技部）員で、東大を経て大蔵官僚となった今村は後の日本蹴球協会（現日本サッカー協会）初代会長、医学部に進んだ木下は大阪医科大教授から大阪毎日新聞の初代運動課長に就任、互いに日本スポーツ界の発展に寄与したのである。

一高13マイルレースは時事新報が翌々日の5月15日付でいち早く報じたのはじめ、遠く北海道毎日新聞も同19日付で掲載するなど²²⁾各地に広く知れわたり、児童向けの「少年世界」（博文館）にも「十三哩競走²³⁾」として素早く掲載されたほどである。

全寮制であった当時の一高生はトップエリートの予備軍であり、1890（明治23）年、「文武の諸技芸を奨励スル」として校友会が結成されると、文芸部を除く8部すべてが運動部で占められている。文武両道を体現すべ

く、「一高式猛練習」は各運動部の合言葉であり、とりわけ野球部は横浜の外人チームに勝利するなど明治中期に全盛を誇った。陸上運動部と称した陸上部員たちは1891年から始まった陸上大運動会の花形であり、帝国大学運動会に於いても抜きん出た実力を示していた。

4.2 時事新報が初の主催イベント

山口高校の長距離競走、3カ月後の一高13マイル競走両レースはそれぞれ当時の新聞メディアが注目するところとなった。とりわけいち早く報じた時事新報は2年後の1901年11月9日、東京上野・不忍池湖畔を周回する「十二時間の長距離競走」を開催したのである。山口高校、一高のレースが校内に限定した健脚競争や健脚養成であったのに対し、主催を新聞紙上で告知し、広く一般を対象に実施を呼びかけ、参加を募った。この点では新聞社（時事新報）の自作自演であり、演出の上での企画や報道となった。松浪稔は「自社主催によるスポーツイベントを自社紙面を通して大々的に報道したという意味で、この『長距離競走大会』を日本における最初のメディア・スポーツイベントとして位置付けることが可能であろう²⁴⁾」と指摘する。

時事新報主催の長距離大会はどのようなものであったのか。同社は1901年10月1日付社告で「広く世間の健脚者を募集して長距離競走を実行せしめんと欲」し、「全国第一等の健脚者を発見し本社の懸賞金を贈与し、勝利を博したる顛末を表彰」すると大々的に告知した。大会は1周1,470mある上野・不忍池のほつりを午前4時から午後4時までの半日間で70マイル（約76周、112.6 km）の距離を走り続けることを目標とした。

山本邦夫の「陸上競技史 明治編」によれば、当時外国の記録が12時間90マイルであり、日本最初の試みとして1時間に6マイルという計算から70マイルに決したという²⁵⁾。応募者は100人余りで、体格検査の結果15人の選手を選抜した。年齢は20代から40代、職業は学生5人、車夫4人、事務員、郵便集配人らであった。時事新報はこうした経緯を事細かに報じた。

選手が確定すれば「経歴談」, 「練習」など選手の似顔絵入りの紹介記事を連載し, ひたすら大会の盛り上げに励み関心の高まりを招いた。当然, 賞金, 商品の寄贈者名も逐一報じた²⁶⁾。

大会翌日の紙面には3面を割いた²⁷⁾。優勝者は茨城県の人力車夫, 安東初太郎であったが, 記録は既定の76周には及ばぬ71周余りであった。12時間の耐久レースに応じるにはまだ体力不足であったと指摘できよう。時事新報は同月13日付の社説で「西洋に行わるる十数時間もしくは数日間に亘る長距離の競技に比すれば固より同日に語る可らず, 今や運動流行の機運に際し, 更に長時間の耐久力を試験するは体力の奨励上決して無益の労に非ざる可し」と, 体育奨励の観点から長距離走の重要性を力説した。いみじくも, 日清戦争を契機として指摘, 懸念された国民(兵士)の体力問題と長距離競走が密接な関係のあることを強調したのである。

初の一大スポーツイベントとして華々しく主催, 報道した時事新報に対し, 東京各紙は報じるか, 黙殺するか, 批判を加えるかの対応を迫られた。批判派の急先鋒は「萬朝報」であった。大会翌日の11月10日付で「(時事新報は)運動界に新生面を開くとやら声言すれど, 新聞社の所業として何の意なる矢を解する能はず」とし「観る者をして酸鼻に堪えざらしめたり, 知らず時事新報は是を人道をそこなうの挙動と思わざるや」と, 15人の走者のうち9人しか完走できなかったことを挙げて手厳しい批判記事を掲載した。時事の社説はこの萬朝報の記事を強く意識したうえでの反論であり, 自社の主催事業に対する自画自賛報道と言えよう。

一方で, 東京朝日新聞はフェアであった。時事新報や萬朝報と同じ11月10日付紙面に「不忍池畔の長距離競走会」の見出しで, 35行, 全文632字の分量でレースの模様を紹介した。すべての走者の氏名, 年齢を載せたばかりか, 時事が上位選手に金品を贈った事まで詳述した。一高生の13マイル競走では記事化を見送っていた東京朝日であるが, 他社の主催事業とはいえ東京で初の試みとなる大衆参加の長距離レースに関してはニュースバリューのあるスポーツイベントと受け止め, 冷静なニュース報道に踏み

切ったのであろう。

4.3 大阪毎日新聞が追隨

時事新報が企画した12時間70マイル競走は、完走者こそ出現せず不完全なまま幕を閉じた。しかし、新聞社の主催事業としては認知度を高める一定の役目は果たしたと言えよう。新規購読者の獲得にどこまで効果をもたらしたかは定かでないものの、長距離走への関心を集めるイベントであったことは間違いない。

時事の事業に大いに刺激を受けたのは大阪毎日新聞社（以下大毎）であった。一高生が山口高生の試みに反応したのと同様、大毎は大いに対抗意識を募らせたのである。時事の大会のわずか2週間後、1901年11月24日付大毎紙の一面に「長距離健脚競走大会」の告知を載せた。時事が富国强兵につながる体力錬成、国民体力の向上を意図としてレースを発案したのに対して、大毎は東京へのライバル意識をむき出しにして長距離走を企画した。時事のレースで12時間70マイルの完走者が出なかったことをとらえて「世人をして東京人の柔弱為すなきを笑わしめたり。我が関西には素よりこれ位の脚力を有する者多々なるべきは、我社の信じて疑わざるところをもって（中略）」と、打倒東京の関西ナショナリズムを鮮明にする。

明治期の大阪新聞界は、大阪朝日（大朝）対毎日（大毎）の激しい部数競争が展開されていた。両社の社史によれば1902年の販売部数は大朝11万5,110部²⁸⁾、大毎10万1,306部²⁹⁾と拮抗していた。大毎は後に社長となる業務担当の本山彦一、広告部長として招いた桐原捨三が積極的な新事業の展開に取り組み1900年以降、化粧まわし受領力士の人気投票、素人義太夫投票、俳優人気投票など企画を重ねていった。これらは新聞に投票用紙を刷り込み、販売部数獲得を狙ったのである。さらに、水上大相撲、仕掛け花火大会など奇抜な事業展開は部数増につながると同時に、津金澤聰廣が指摘するように新聞社にとって営利事業化、資本主義的企業化過程への一過程となった³⁰⁾のである。

大毎の長距離競走は、まさに営利事業の展開に他ならなかった。11月24日の最初の告知から開催日（12月15日）まで連日、「長距離競走彙報」と題して同大会にまつわる情報を報じ続けた。大毎の大会は時事新報の12時間・70マイルより短く、8時間で50マイル（80.46 km）の完走を目標とした。会場は南海鉄道沿線の堺大浜にある旧砲台跡地に築いた1周約805mの馬蹄型トラックであった。連日の報道の影響か、申し込みは順調で653人が応募した。大毎は12月10日、申込者を一堂に集めて11人の医師による徹底的な健康診断を実施して「競走に耐えうる」候補者34人を選抜し、抽選で出場者25人を決定した。

大毎の派手な紙面報道に呼応するように、健脚競走大会当日は10万人の人出があったという。レースは午前8時に開始し、午後4時までにはどれだけの距離を走破したかを競った。目標距離は50マイルであったが、5人のランナーが突破した。1位となった村瀬百蔵（岡山県）は桶類製造の26歳で、トラックを112周し距離は56マイルに達した。以下5位まで50マイルを突破し、5人が途中で脱落したのである。

注目すべきは翌日（12月16日付）の大毎紙面である。この年2月に誕生したばかりの編集局社会部からエース記者、太田原在文が「8時より10時まで」など5つの時間帯に分けて大会本記を書き上げた。同紙5-6面の両面全面を使つての大展開は、旧来の漢語調報道とは一線を画すものであった。達者な大会本記に続いて、「兎耳子」と称した記者が軽妙な筆致で「長距離競走評判記」という雑感記事で大会全体の雰囲気や浮き彫りにした。後に毎日新聞社史は「大毎はこのイベントでスポーツ報道の本記と雑感の書き分けを行い、本記だけではうかがい知ることのできない選手と観衆の表情にスポットを当てた³¹⁾」と、大会報道の新機軸ぶりを強調している。

翌日の大毎紙面では「今度の長距離競走会は我国に於いて未だ嘗て見し事なき盛挙にして日本男子の体力を試験し（中略）其の成績は全国は固より欧州各国に発表さるる事にして実に愉快至極の催しなり」と最大級の成果を強調し、翌17日付では「競技者各員の見事なる成績によりて充分満足

すべき結果を収め、我社掛員の喜びより優等者諸氏の喜びより、関西男子の面目の為に誠に慶賀すべき大記念日とはなりたり」と、あくまでも時事＝東京に対する大毎＝関西の優位性を示す論調を貫き、読者の歓心を誘った。時事の長距離大会が完走者を出せずある意味中途半端に終わったのに対し、大毎のレースは10万人の観衆を引き寄せ、5人が完走して当初の目的を達しメディアの関わるスポーツイベントとしての価値を示したというべきであろう。

5. おわりに

1899年2月、本州西端の小都市山口の高校生が挑んだ11.5マイル（約18.5 km）競走は後に「日本最初の長距離レース」と紹介されるに至った。ささやかな学内行事であったが、巧みな報道操作とも呼ぶべき学生たちの周到な仕掛けが功を奏したと言えよう。

では、なぜ山口高校生は破天荒な試みを企てたのであろうか。「日本陸上競技史 明治編」では江戸期、萩藩の武士たちが藩主毛利氏の居城である日本海側の萩と瀬戸内海側の三田尻港（現防府市）をほぼ直線で結ぶ全長約53 kmの陰陽連絡道、「萩往還」を駆け抜けて足腰を鍛錬した「早走り」の伝統が山口高生に引き継がれた³²⁾と推測する。この説に関しては、1902年から山口県知事を務めた武田千代三郎³³⁾の著作「理論実験 競技運動」に、萩藩の早走りに関して「山口高等学校、山口中学及び山口師範学校の生徒間には、今日でも時々三田尻（往復十里）又は小郡（同六里）までの競走が行われるのは旧藩の遺風がなお存在していると見える³⁴⁾」と触れてあり、根拠としたようである。

さらに、98年2月に着任した3代校長河内信朝が学生に体育を奨励したことも遠因であろう。赴任直後の4月には第1回連合運動会を開催するなど運動に理解を示し、当時、3年在学中の長男才三は野球部員だった。これより先、明治20年代の旧山口高等中学校長時代には「熱心に体育を奨励し始業式その他祝日の演説には諄々として健康第一主義を繰り返すを常と

し（中略）、職員生徒等と午餐を共にせる後一同打ち連れて運動場に出て先生自身も蹴球の群に入れり」と紹介されるほどのスポーツ愛好家だったようだ³⁵⁾。こうした校長の教育・体育観が少なからず山口高生たちに影響を及ぼしたのではなかろうか。

いずれにせよ、山口高生の長距離走の第一報は地元防長新聞によって伝えられ、東京の時事新報、ジャパントイムズが相次いで転載したことで広く周知されることになった。次いでスポーツ雑誌「運動界」や少年雑誌「中学世界」でも記事化され、瞬く間に情報は拡散していったのである。これまで指摘したように各報道媒体の背後には山口高生の存在が見え隠れする。防長新聞にレースの結果を持ち込み、時事新報に働きかけたのも高校生たちであろう。各種雑誌の記事は同高生が投稿、出版社に写真も提供していた。自らの行動を世間にアピールすべく、練り上げたプロデュースぶりと言え、スポーツジャーナリズムを通じて東京の一高生に対抗意識を燃えさせるほどの効果があったのである。山口のレースから2年後、当時の代表的な報道メディアである時事新報と大阪毎日新聞が東西で長距離レースを催すなど新聞社のスポーツイベントとして発展したのは、さすがに高校生たちの思惑を超えた現象であったに違いない。

日本の道路競走の出発点としては山口高校レースの前年、1898年に東京高師（現筑波大）の生徒たち160余人がお茶の水から池上本門寺まで「健脚競走を行った」とする記述が同校の沿革史「創立六十年」³⁶⁾に見える。ただし、正確な日時、距離などは不明であり、何より当時のジャーナリズム媒体がこのレースに触れた形跡はない。従って史実的裏付けに欠けることから「国内最初の長距離レース」と形容するには躊躇せざるを得ないのである。

他方、山口高校のロードレースはその後、紀元節の風物詩として1902年まで4回続いた。防長新聞は2回大会以後もレースを報じ³⁷⁾、東京の読売新聞にも2回大会の様子が紙面で紹介³⁸⁾された。しかし、次第に参加者が減り運動会の長距離競走種目に吸収されていった。

山口高校そのものも運営母体である地元教育財団、防長教育会の財政難によりその歴史を閉じ、官立実業専門学校の山口高等商業学校として1905年から再出発した。ただ、1919年官立山口高等学校として再興を果たし、山口高商とともに戦後、新制山口大学に再編された。

一方、新聞社主催の長距離レースは1901年以降しばらく途絶えていたが、1909年3月21日に大阪毎日新聞が神戸湊川埋立地から大阪・新淀川西成大橋間の20マイル（32 km）長距離競走を「マラソン大競走」と銘打って開催、「マラソン」が固有名詞として広まる契機となったのである³⁹⁾。1896年にアテネの第1回近代オリンピックで陸上種目として実施され、翌年には米国ボストンマラソンが開始されるなどマラソンは既に世界の潮流となり始めていた。それまで相撲や野球の報道を中心として発展した明治期日本のスポーツ報道であったが、地方の高校生が試みた長距離レースはスポーツジャーナリズムに新たな境地を開く端緒となったのではあるまいか。

注

- 1) 大野 晃（2005）「日本スポーツの大衆化とマスメディア」『二十世紀スポーツの実像』創文企画，p. 110
- 2) 牛木素吉郎（2004）「スポーツジャーナリズム小史」『現代スポーツ評論11』創文企画，p. 127
- 3) 中条一雄（1980）「スポーツと朝日新聞」『朝日新聞記者の証言2 スポーツ記者の視座』朝日ソノラマ，p. 6
- 4) 綿貫慶徳（2011）「黎明期の新聞スポーツジャーナリズムに関する予備的考察：大阪毎日新聞に着目して」『上智大学体育』（44），p. 17
- 5) 伊東 明（1976）「体育・スポーツ資料集 明治時代の新聞記事 野球編」『上智大学体育』（9）のほか「運動会編」「庭球編」をまとめた。
- 6) 『山口高等商業学校沿革史』（1940）によれば、山口高校の学内団体である学友会は1888年に組織され、月刊雑誌「学友」を創刊した。しかし、一部教官の高圧的態度に反発し授業ボイコットするなどした1893年の「寄宿舎事件」を機に学友会は活動を停止していた。1898年に再興し学芸部、運動部、会報部の3部制をとり、学内雑誌も「学友会報」として再刊した。運動部は、剣術、柔術、弓術、ベースボール、フットボール、ローンテニス、遠足の7部で構成した。

- 7) 鶴狩新一 (1985) 『朝野新聞の研究』みすず書房, pp. 44-45
- 8) 防長新聞は1942年、新聞統廃合令によっていったん下関市の関門日日新聞と統合し「関門日報」となり、1945年に防長新聞へ改めた。戦後は山口県紙として存在したが部数は低迷し、経営不振のため1978年4月末に自己破産し、廃刊となった。山口県立図書館は山口大学と連携し、同図書館所蔵の同紙をデジタル化し、1884-1978年紙面の縮刷版を作成した。一部欠落しているが、同図書館で閲覧が可能である。1992年から2006年にかけて、同じ題字の「防長新聞」が岩国市で発行されていたが、継続性はない。
- 9) 1899年4月8日付防長新聞, p. 2
- 10) 前掲書『山口高等商業学校沿革史』, pp. 460-462
- 11) 山口高等学校学友会『学友会報 第4号』1899年3月15日発行, pp. 92-97
- 12) 有山輝雄 (1992) 『徳富蘇峰と国民新聞』吉川弘文館, pp. 54-55
- 13) 平田萬里遠 (1979) 「新聞人 伊藤欽亮-時事新報時代を中心に」『慶応大学新聞研究所年報』12号, pp. 23-60
- 14) 朝日新聞大阪本社販売百年史編集委員会 (1979) 『朝日新聞販売百年史 (大阪編)』朝日新聞大阪本社, p. 134
- 15) 長谷川進一編 (1966) 『ジャパントイムズものがたり』ジャパントイムズ, pp. 12-13
- 16) 山本武利 (1996) 『占領期メディア分析』法政大学出版局, pp. 95-97によれば、雑誌「新公論」1905年1月号にジャパントイムズの貧弱さを酷評した東京・築地の外国人読者による投書が掲載された。
- 17) 伊東 明 (1969) 「日本における体育・スポーツ雑誌の研究」『上智大学体育』(2), pp. 18-21
- 18) 「運動界発行の趣意」『運動界』創刊号 (1897年7月5日号) 大空社, p. 1 (1986年復刻版)
- 19) 前掲書『運動界』1898年1月5日号, p. 1
- 20) 浅岡邦雄 (2002) 「明治期博文館の主要雑誌発行部数」『明治の出版文化』国文学研究資料館編, 臨川書店, pp. 143-177
- 21) 大木 操, 原田憲次郎 (1937) 「陸上運動部部史」『向陵誌』一高寄宿寮編 (1984年復刻版, 第1巻駒場編) 一高同窓会, pp. 1015-1016
- 22) 伊東 明 (1971) 「体育・スポーツ資料集 明治時代の新聞記事 運動会編」『上智大学体育』(5), p. 21
- 23) KT生 (1899) 「十三哩競走」『少年世界第5巻12号 (1899年6月1日号)』博文館, pp. 96-97
- 24) 松浪 稔 (2007) 「日本におけるメディア・スポーツ・イベントの形成過程に関する研究」『スポーツ史研究』(20) スポーツ史学会, pp. 51-65
- 25) 山本邦夫 (1970) 『陸上競技史 明治編』道と書院, pp. 125-127
- 26) 1901年10月1日-11月8日付時事新報

- 27) 1901年11月10日付時事新報, pp. 4-5, 9
- 28) 朝日新聞百年史編集委員会 (1995)『朝日新聞社史 資料編』朝日新聞社, p. 320
- 29) 毎日新聞130年史刊行委員会 (2002)『「毎日」の3世紀—新聞が見つめた激流130年 別巻』毎日新聞社, p. 96
- 30) 津金澤聰廣 (1996)『大阪毎日新聞社の『事業活動』と地域生活・文化』『近代日本のメディア・イベント』同文館, pp. 217-229
- 31) 毎日新聞130年史刊行委員会 (2002)『「毎日」の3世紀—新聞が見つめた激流130年 上巻』毎日新聞社, pp. 416-421
- 32) 前掲書『陸上競技史 明治編』, p. 121
- 33) 武田千代三郎 (1867-1932) は明治-昭和初期の官僚, スポーツ指導者。帝国大在学中に師のストレンジからスポーツ論を学ぶ。内務官僚として秋田, 山口, 山梨, 青森各県知事を歴任し, 神宮皇学館長や大阪高商校長, 大阪商科大学長事務取扱を務めた。この間, 大日本体育協会副会長に就任。1917年, 京都-東京間の東海道五十三次マラソンリレーを「駅伝競走」と名付けたことでも知られる。
- 34) 武田千代三郎 (1904)『理論実験 競技運動』博文館, p. 371
- 35) 作間鴻東編 (1936)『河内信朝先生小伝』蔵重哲三発行, pp. 50-51
- 36) 東京文科大学・東京高等師範学校 (1931)『創立六十年』, p. 402
- 37) 防長新聞は1900年2月13日付で2回大会, 01年2月13日付で3回大会の結果を2面に掲載した。1回大会に比べると報道量は縮小した。
- 38) 1900年2月15日付読売新聞, p. 4
- 39) 前掲書『「毎日」の3世紀—新聞が見つめた激流130年 上巻』, pp. 440-443

参 考 文 献

- 浅岡邦雄 (2002)「明治期博文館の主要雑誌発行部数」『明治の出版文化』国文学研究資料館編, 臨川書店
- 朝日新聞大阪本社販売百年史編集委員会 (1979)『朝日新聞販売百年史 (大阪編)』朝日新聞大阪本社
- 朝日新聞百年史編集委員会 (1995)『朝日新聞社史 資料編』朝日新聞社
- 有山輝雄 (1992)『徳富蘇峰と国民新聞』吉川弘文館
- 伊東 明 (1969)「日本における体育・スポーツ雑誌の研究」『上智大学体育』(2)
- 伊東 明 (1971)「体育・スポーツ資料集 明治時代の新聞記事 運動会編」『上智大学体育』(5)
- 伊東 明 (1976)「体育・スポーツ資料集 明治時代の新聞記事 野球編」『上智大学体育』(9)
- 鷲狩新一 (1985)『朝野新聞の研究』みすず書房
- 牛木素吉郎 (2004)「スポーツジャーナリズム小史」『現代スポーツ評論11』

- 大木 操, 原田憲次郎 (1937)「陸上運動部史」『向陵誌』一高寄宿寮編 (1984年復刻版, 第1巻駒場編) 一高同窓会
- 大野 晃 (2005)「日本スポーツの大衆化とマスメディア」『二十世紀スポーツの実像』創文企画
- 作間鴻東編 (1936)『河内信朝先生小伝』蔵重哲三発行
- 武田千代三郎 (1904)『理論実験 競技運動』博文館
- 津金澤聰廣 (1996)「大阪毎日新聞社の『事業活動』と地域生活・文化」『近代日本のメディア・イベント』同文館
- 東京文理科大学・東京高等師範学校 (1931)『創立六十年』
- 中条一雄 (1980)「スポーツと朝日新聞」『朝日新聞記者の証言2 スポーツ記者の視座』朝日ソノラマ
- 長谷川進一編 (1966)『ジャパントイムズものがたり』ジャパントイムズ
- 平田萬里遠 (1979)「新聞人 伊藤欽亮—時事新報時代を中心にして」『慶応大学新聞研究所年報』12号
- 毎日新聞130年史刊行委員会 (2002)『「毎日」の3世紀—新聞が見つめた激流130年上巻』毎日新聞社
- 毎日新聞130年史刊行委員会 (2002)『「毎日」の3世紀—新聞が見つめた激流130年別巻』毎日新聞社
- 松浪 稔 (2007)「日本におけるメディア・スポーツ・イベントの形成過程に関する研究」『スポーツ史研究』(20) スポーツ史学会
- 山口高等学校校友会 (1899)『校友会報 第4号』
- 山口高等商業学校 (1940)『山口高等商業学校沿革史』
- 山本邦夫 (1970)『陸上競技史 明治編』道和書院
- 山本武利 (1996)『占領期メディア分析』法政大学出版局
- 『運動界』創刊号 (1897年7月5日号) 大空社
- 『少年世界第5巻12号 (1899年6月1日号)』博文館
- 綿貫慶徳 (2011)「黎明期の新聞スポーツジャーナリズムに関する予備的考察: 大阪毎日新聞に着目して」『上智大学体育』(44)

新聞・雑誌

- 『防長新聞』1899 (明治32) 年2月14日付2面, 1900 (同33) 年2月13日付2面 (上記以外は本文中「表2」「表3」に記載)
- 『時事新報』1898 (明治31) 年1月1日付14面, 同2日付15面, 99年1月1日付14面, 99年2月15日付4面, 同5月9日付2面, 同15日付4面, 1901 (明治34) 年10月1日付4面, 同2日付4面, 同7日付5面, 同9日付5面, 同22日付5面, 同23日付5面, 同27日付5面, 同11月10日付4・5・9面, 同11日付5・6面,

同12日付 5 面, 同13日付 2 面

『ジャパンタイムズ』1899 (明治32) 年 2 月16日付 2 面

『東京朝日新聞』1901 (明治34) 年11月10日付 4 面

『萬朝報』1901年11月10日付 2 面, 同11日付 3 面

『読売新聞』1900 (明治33) 年 2 月16日付 4 面

『大阪毎日新聞』1901年11月24日付 1 面, 同28日付 7 面, 12月 3 日付 7 面, 同 4 日付 7 面,

同11日付 7 面, 同16日付 2・5・6・7 面, 同17日付 7 面, 同26日付 7 面

『運動界』1897 (明治30) 年 7 月創刊号, p. 1, 1898年 2 月号 (第 2 卷第 2 号), p. 1,

1901年 3 月号 (第 3 卷第 3 号), pp. 24-25

『中学世界』1899 (明治32) 年第 2 卷第 8 号, p. 3, p. 118, 1900年第 3 卷第 1 号, p. 104,

1901年第 4 卷第 6 号, p. 142

『少年世界』1899 (明治32) 年第 5 卷第12号, pp. 96-97